



特定非営利活動法人

アジア・アフリカと共に歩む会

南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌 2020年

- ・ 2020-12-26 [ブックレビューコンテストおよび読書推進ポスターコンテストを実施](#)
- ・ 2020-10-26 [コロナ禍におけるTAAAの活動と意義について](#)
- ・ 2020-09-05 [引き続き、コロナ禍影響下での図書支援活動](#)
- ・ 2020-07-12 [コロナ影響下での図書支援活動](#)
- ・ 2020-06-20 [コロナ禍における南アのロックダウン（3）～有機農業塾周辺の人々の動き～](#)
- ・ 2020-05-23 [コロナ禍における南アのロックダウン（2）～ロックダウン・ガーデニング～](#)
- ・ 2020-05-17 [コロナ禍における南アのロックダウン（1）～最大の問題は食糧確保～](#)
- ・ 2020-04-19 [現地で得た情報を紹介します](#)
- ・ 2020-04-08 [図書委員会生徒も先生たちも頼もしく個性豊かだった](#)
- ・ 2020-03-29 [名前のある図書室・絵やポスターで飾られた図書室](#)
- ・ 2020-03-19 [学校図書室には個性豊かな「アナログ文化」が咲き誇っていた](#)
- ・ 2020-03-07 [TAAA対象校を訪問（2）](#)
- ・ 2020-02-29 [TAAA対象校を訪問（1）](#)
- ・ 2020-02-01 [アンバサダーが活躍するMOATS](#)

2020-12-26 南アフリカ

ブックレビューコンテストおよび読書推進ポスターコンテストを実施



Duduzile中
ブックレビューコンテスト優秀生徒



Mehlomnyama小 読書推進
ポスターコンテスト優秀生徒



Mehlomnyama小 読書推進
ポスターコンテスト低学年の部優秀生徒

N連図書事業は、コロナ禍の影響により2ヶ月間の延長の後、10月末に第1年次が終了となった。事業後半は、南ア国内の全面的なロックダウンで活動が滞り、学校再開後も生徒の登校制限や冬期の感染拡大など、一進一退の状況が続いた。そのような中でも対象校では生徒の図書室利用の重要性

を認識し、感染予防に努めながら活動を行い、小学校では読後のブックレビュー（感想文）を書いたり、読書推進ポスターを制作する等、少しづつ図書活動が定着してきた。高校では図書室に各教科の参考書を配備することで、生徒が自習できるようになり、図書室を利用した生徒の成績が向上しているとの報告もあった。

これはもちろん各対象校の校長の協力や司書教師の努力によるものであるが、何より図書委員会生徒の図書室と読書への興味、活動への積極的な取り組みによるものが大きい。残念ながら学校再開時に退学したり、委員会から離れた生徒も見られたが、多くの図書委員会生徒が、制約のある状況下で委員としての任務を果たし、校内で図書室利用推進のリーダーとして活躍したことは頼もしい。

図書活動では圧倒的に女子生徒の参加が多いのだが、各対象校には必ず少数の“本好き”的男子生徒の姿が見られる。南アの学校では“読書は女子のもの”という風潮が見られるが、彼らは1人でも図書委員会に参加したり、図書室にやって来たりする。そのような時、若い男性で自身も図書委員会を経験しているモンドリが指導員でいることは、彼らにとって心強いことだろう。次年度は彼らと共に男子生徒の読書促進“Boys can read（男子も本を読める）”を行いたいと考えている。

11月には事業で書籍の購入を行っている現地の大手書籍販売店Bargain Booksより新品の本430冊の寄贈があり、次年度各対象校に配布を予定している。一部はブックレビューコンテストを行ったDuduzile中の優秀者に賞として贈呈した。現地の企業が事業への認識とサポートをくれたことは喜ばしく、書籍販売店と学校をつなげられたことは、今後の図書活動の広がりに向けた学校への情報提供となった。次年度は蔵書の補充や本の貸出しを継続して行うと共に、各対象の図書室にパソコンとプリンターを設置し、委員会生徒がパソコンを活用しながら図書活動を推進する。

（TAAA南ア事務所 平林薰）

[Page Top ▲](#)

2020-10-26 日本・南アフリカ

コロナ禍におけるTAAAの活動と意義について



本を整理整頓する図書委員会生徒たち



10月18日梱包作業の様子



マスクをして読書タイム
Imbalancane小コンテナ図書室

会員の皆さん、支援者の方々には、南アフリカの子どもたちのためにいつもあたたかいサポートをいただき、ありがとうございます。おかげさまで当会は長年にわたり無理なく、しかしながら着実に活動を進めてきましたが、今回のコロナ禍は私たちの活動にも大きな影響をおよぼしました。

日本においては、今年3～5月、毎月定例の梱包作業を中止しましたが、6月からは作業場の換気を良くし、お互いマスクを着用しながら、活動を再開しております。ただ、今後も状況を注視しながら、柔軟な判断をしていきたいと考えております。

一方、南アフリカにおいては、急激に感染者が増え、学校での図書活動ができなくなるなど、大きな影響が出ました。弱い立場にある方がますます困難な状況に陥ることは、日本も南アフリカも同様です。したがい、こういう時こそ、感染対策と教育支援活動を両立する必要があり、強い志を持ちながら工夫していくことが求められていると感じております。

会員の皆さん、支援者の方々におかれましては、まずはご自愛いただきつつ、南アに温かい眼差しを向けていただければ幸いです。

(副代表 丸岡 晶)

[Page Top ▲](#)

2020-9-5 南アフリカ

引き続き、コロナ禍影響下での図書支援活動



チョペラ小図書委員会生徒が本の貸出し



司書教師と図書委員会生徒が本の貸出し

前回の記事でお伝えした通り、ドゥエシューラ学区の対象校は、ロックダウンによる長い閉鎖期間を経て6月に再開し、準備が整った学校から図書室利用と本の貸し出しを再開しました。

TAAAは図書室利用再開にあたり、各対象校に殺菌消毒剤、箒とハタキを配布し、消毒と掃除などの感染予防対策を呼び掛けました。また、TAAA図書指導員のモンドリさんは学校巡回訪問をする際、感染予防用返却箱に返却された本を一冊一冊丁寧に消毒してから本棚に戻す作業を行ってきました。



図書室入室時に手の殺菌消毒



返却箱



返却本を殺菌消毒

12校の対象校のなかには、準備が整わないと図書室を閉じたままの学校もありましたが、図書室利用を再開した学校のなかには、「待ってました！」とばかりにやってくる生徒たちがいて、そのような学校では図書委員会生徒たちが頼もしく、彼らのリーダーシップの下で、入室前の手の消毒、マスク着用、「ソーシャルディスタンシング」等、感染予防対策が徹底して行われていました。しかし、タイミングの悪いことに南アでは6月～8月はウイルス感染が拡大しやすい冬にあたる

ため、7月後半から全国的に感染状況が悪化してしまいました。対象校でも教師を中心に感染者が見られるようになったため、7月24日から1ヶ月再度閉鎖に追い込まれました。図書活動も再度中断となりました。

8月24日から基本的に全校生徒が再復帰となりました。しかし、学年ごとにローテーションにして登校しているため、未だに完全な復帰には至っていません。生徒たちは間隔をあけて授業を受けるため、教室はスペース不足となり、同じ日に全生徒を登校させられないのです。また、基礎教育省の指示により、感染の有無にかかわらず高齢または持病のある教師を自宅待機にさせているため、授業を行う教師の数が不足し、生徒は登校しても自習というケースが多く見られます。

このような落ち着かない状況ですが、生徒たちが再復帰するやいなや、TAAAは対象校への巡回訪問を再開しました。図書室利用の進捗状況確認を続け、引き続き返却された本の消毒を行い、生徒たちに感染予防対策指導を行っています。

感染の不安が完全になくなるまでは、TAAAも巡回指導訪問と図書活動を中断するという選択もありますが、登校しても授業が受けられず、自宅にいても読む本が一冊もないという状態のなか、「本が読みたい！」という生徒たちの切実な声を無視する訳にはいきません。

長びくコロナ禍の影響下でドゥエシューラ学区を含めた遠隔地の生徒たちは、学業に大きな遅れをとっています。楽しみながら読解力を身に付けられる「読書」は、今、生徒たちにとってとても貴重な学習時間になっています。また、前代未聞の不安な環境のなか、いつとき日常生活から違う世界に連れて行ってくれる美しい絵本や小説にふれることは、子どもたちの心のケアにも大きく役立っているのではないでしょうか。

自身も元TAAA対象校で図書委員だったモンドリさんは、読書が生徒たちに与える精神への栄養を十二分に理解しているのでしょう。難しい舵取りが迫られている中で、感染予防策を取りながら丁寧な学校図書活動を維持してくれています。本当にありがとうございます。

早く日常に戻って、各対象校で笑い声があふれるマスク・フリーの図書委員会活動が再開されますようにと祈っています。しかし、焦ってもしかたがありません。本をかりにくる生徒には、今だからこそ心に浸みる深みある読書を楽しんでもらえたらと思っています。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2020-7-12 南アフリカ

コロナ影響下での図書支援活動



カラフルなマスク着用で本を取りに来る生徒たち



入室時の手の消毒と記帳を徹底させる

「今思うと、なんという神業的タイミング！」 3月上旬に一緒に視察訪問をした大友さんと会う度に出てくる言葉です。 現行の学校図書支援活動（日本NGO連携無償資金協力事業「ドゥエシユーラ学区の生徒の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得」）における私たちの視察訪問のタイミングがほんの少しづれていたら、南アに入出国できない可能性がありましたし、もっとずらしていたら視察訪問そのものが出来ませんでした。事業の進捗状況そのものも、今思うとあたかもロックダウンに備えていたかのように、学校閉鎖前に図書活動基盤をしっかりと整えた感があります。全ての対象校（12校）で図書室が設置され、蔵書が整い、図書委員会生徒たちが活動を開始し、図書の貸し出しや図書室利用が始まり、「さて、これから図書利用を全校生徒に広めよう」と腕まくりをしていた矢先に、学校閉鎖となりました。3月16日で、私たちの出国日の5日後でした。

日本の自粛要請と異なり、南アのロックダウンは、庭にいるだけでパトロール中の警官に「家に入れ」と叱られる厳しいもので、この間は学校巡回訪問ができませんでした。平林プロジェクトマネージャーと現地スタッフのモンドリさんは、TAAA南ア事務所で本の整理や分類、各対象校への配布準備をして学校再開に備えていました。

6月8日によくやく学校が再開となりましたが、6月中に登校できる生徒は、小学校は7学年生、高校は12学年生とそれぞれ最終学年生に限られました。他学年生徒は引き続き自宅待機です。このような中途半端な状態であっても、学区長のザミサさんから、「TAAAの図書支援活動は是非すぐに再開してほしい」との強い要望もあり、TAAA南ア事務所は、各対象校の図書室用に消毒液と返却ボックスを用意して、図書活動を再開しました。図書室利用時は、1. 一度に入室する生徒の数を制限する、2. 手を消毒して入室する、3. 利用者ノートに名前を記入する、4. 返却時には直接本棚に戻さず必ず返却箱に戻し、TAAAスタッフが巡回時に箱の中の本を消毒して棚に戻す、というルールを作り、各校に徹底させました。

校長と司書教師には、登校できる生徒には、感染予防のルールに基づいて図書室を積極的に利用するように呼び掛けるよう願いし、また、本を借りにくる生徒たちには、自宅で待機中の他学年の兄弟姉妹用にも本を借りて帰るように伝えました。登校できない学年の生徒たちは、せめて家で本を読んでもらいと思っています。

また、学校に行けない生徒のために、地域のコミュニティーセンターで毎週水曜日に本を寄贈する活動もしました。6月中に3回行いましたが、累計180人以上の生徒たちの他、約80名の近所の大人が本を取りにきてくれました。

対象地域からそれほど離れていない都市部となると、オンライン授業を行う学校もありますし、なくても親から勉強をみてもらえる生徒もいるでしょう。私たちの対象地域を含め、学校からのサービスも家庭での教育リソースも乏しい遠隔地域の子どもたちは、ロックダウン期間は平常時以上に取り残されました。国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」のモットーの一つに、「誰一人取り残さない」がありますが、南アの遠隔地域のように地域ごと取り残されている場合、そこに住む子ども達の大多数は取り残されます。

TAAAのような小さなNGOは、大きなことはできないかわりに、根ざしている地域内では状況に応じて小回りに対応できます。今回のように状況が刻一刻と変化する緊急事態時にこそ、学校や行政が迅速にできることを比較的自由にできて、手が届かないことを創意工夫でリーチできるNGOの柔軟な体質を活かして、地域で「取り残されている大多数の子ども達」に図書活動を通して、手をさしのべていきたいと願っています。

しかし、コロナ禍は収束の兆しが見えず、先行き不透明な厳しい状況が続きいており、当分は不

安を抱えながらの活動となります。南アにおいても国内の活動においても、予防・安全を第一に考えて、無理をせずに出来ることをしていきたいと思っています。引き続き、皆さまの温かい応援やサポートをどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2020-6-20 南アフリカ

コロナ禍における南アのロックダウン（3）

～有機農業塾周辺の人々の動き～



アボカド売りの少年たち



ンギディさんの畠

ロックダウン中、農業塾も基本的には閉鎖となったため、日頃農業塾で畠仕事をしている地域住民は、家の敷地内で畠作りをしたが、ンギディ氏や一部の近隣住民は継続して農業塾敷地内で畠作りを行った。農業塾メンバーたちは、レベル3に引き下げられた6月初旬から敷地内の草刈りや清掃を行い、再開の準備を進めている。農業塾の中心メンバーであるボングムーサ、ンコリシがダーバンに短期契約の仕事を行っている間、近くに住む卒業生のトラさん（女性）が農業塾の管理をしてくれた。敷地の清掃の際にはトラさんのお父さんまで手伝ってくれたと言う。農業塾が地域の人たちに守られ、大切に使われていることをうれしく思った。

卒業生のチリザさんはムシカジ山のふもとの広大な畠でバターナッツを生産し、ロックダウン中も継続して収穫、販売を行った。その後、家の周りの土地を利用して豆の栽培を行っており、すでに販売も始まっている。車を持たないチリザさんは、家からムシカジ山のふもとの畠まで徒歩で片道3時間かけて通っていた。もう少し近くに十分な広さの敷地があれば、と探していたところ、以前州農業省のコミュニティー菜園として使われ、現在は利用されていない土地を紹介され、地域の若者7名と活動開始の準備を進めている。

政府は大統領を筆頭に農業省、遠隔地域開発省、経済開発省など各省が“食糧生産は重要な産業であり、雇用促進にもつながる”と明言しており、また健康志向などで有機作物の需要も高まっていていることから、チリザさんが有機農業のロールモデルとして、地域で広く認識されることを期待している。チリザさんの畠には近所の人たちが収穫物だけでなく苗も買いに来て畠作りをしていると言う。彼の活動は多くの人々に影響を与えており、農業塾の“アンバサダー”として活躍てくれている。

「これからどう生きていけばいいのか」を考え何かにトライする時間

ロックダウン直前に農業塾で開催された研修会に参加した若者たちは、この期間を利用して家庭菜園の実地を行った。6月初めからはザマ氏が時間を見て彼らの畑を訪問し、サポート・アドバイスを行っており、小さなグループでの活動も見られるようになった。山間部地域住民も畑作りを継続して行っているが、レベル5、レベル4の期間には、家の敷地内で畑仕事をしていて警察官に“家に入れ”と怒られた事例もあったと言う。ロックダウン中は南ア全土でこのような軍や警察による威圧的な取り締まりが見られたが、それでも全体的に遠隔地域は町中よりも緊張感が低かったと言えるだろう。

ロックダウンレベル5と4の際には、スーパーに買い物に出かけてもさすがにぶらぶらしている子供たちは見かけなかった。6月に入り学校も2学年(7年生と12年生)が再開となって、すでに休みに飽き飽きしているといった感じで子供たちの遊ぶ姿が見られるようになった。先日農業塾を訪問した際、農業塾近くの未舗装道路の坂の上に、カートを押した2人の男の子の姿が見えた。近づいてみるとカートの中には大きなアボカドがたくさん入っており、売り歩いているのだった。値段を尋ねると2個で5ランド。家の庭で自然になっているのでコストはかかっていないとは言え、安い！私は20ランドで8個購入した。おそらく家族が近所の人たちに販売する姿を見ていたのだろうが、ロックダウン中ぶらぶらせ、時間を有効に使って商売を学んでいる子供たちを逞しく思った。

農業塾からの帰り道、トゥートンの交差点に戻って来た時、ピックアップトラックにホウレン草を積んで販売している若者たちを見かけた。すぐうしろにボクサーという大きなスーパー・マーケットがあるが、ここならレジで並ぶ必要もなく、人々が購入する姿が見られた。地域の若者たちが、誰かに言われるのではなく自分自身で何ができるのかを考え、行動する時が来たのだと感じた。コロナ禍はまだまだ続いており、社会がどうなって行くのか先行き不透明ではあるが、ロックダウンが私たちに“これからどう生きて行けばいいのか”を改めて考え、何かにトライしてみる時間をくれたのではないかと少し前向きな気持ちになった。

(TAAA南ア事務所 平林薰)

[Page Top ▲](#)

2020-5-23 南アフリカ

コロナ禍における南アのロックダウン（2） ～ロックダウン・ガーデニング～



MOATS敷地内



コミュニティー菜園

今日の時点でも国内の感染者数、死者数は確実に増加しており、ロックダウンをしなければもっと大変なことになっていた可能性がある。“ウィルスから人々を守ること”と“経済を維持すること”的相対する難問に立ち向かうため、政府は大変難しい選択、対応をしなければならないことは理解できるが、南アのような社会状況の場合、ロックダウンが経済格差を浮き彫りにし、弊害を大きくしてしまったともいえる。

コロナ禍は人種や性別、社会的地位等に関係なく、人々にとって“公平”に脅威であり、そのことが社会の連帯を深めたとはいえるだろう。テレビ局が募集した基金には視聴者から多くの募金が集まり、各地域のNPO等を通して食糧配給が行われている。現時点では食糧配給は最優先・最重要活動であると言えるが、気になるのは、政府も大企業・富裕層もいまだにハンドアウト（施し）で問題を解決しようという意識が強いことだ。何故“自分たちの手で作ろう”と言うメッセージを送らないのだろう。人々の自立に向けた技術習得や実践の機会を何故もっと増やさないのだろう。穿った見方をすれば、この大多数の人々には“労働力”として存在していて欲しいということなのだろうか。

このような非常事態に少しでも自分たちの手で食糧を生産している人々は強い。TAAAは2010年から2019年まで、JICA草の根技術協力事業として、学校や農業塾を拠点に有機菜園の普及活動をしてきたが、有機農業事業に携わった先生方から“ロックダウン・ガーデニング”というメッセージや写真を受取った。ムナフ小のルコジ先生はお孫さんと一緒に畑作りをしており、“TAAAの菜園プロジェクトで多くを学べたことに感謝し、今、周りの人たちに伝えている”と話す。

昨年4月に地元に引き継がれた農業塾MOATSの敷地内では、農業塾の番人と呼ばれているンギディさんと地域のお母さんたちが継続して畑作りをしており、農業塾卒業生のチリザさんは、自分の畑で採れた収穫物をどんどんスーパー・マーケットに販売して事業を拡張している。

今回のコロナ禍は、世界中の人々にとって苦難となっているが、同時に私たち一人一人の生活、社会について改めて目を向け、少し立ち止まって考える機会となったのではないだろうか。“少しでも自分の手で食べ物を作る”ことの意義が深まってきたように感じている。

前述の通り、学校はイースター休暇直前に突然の長期閉鎖に入ってしまい、休暇中に生徒に読書をさせるための本の貸出し等、十分な準備ができなかったことが残念である。現時点では6月1日より7年生と12年生が復帰し、その後段階的に他学年も復帰する予定であるが、再開後すぐに外の団体が学校訪問することを許可されるか、また図書活動を行う時間が十分に取れるか等は不確定である。現在は昨年末に日本から到着した本や算数セットを仕分けして、対象校別に箱作りを行っている。万一、しばらく学校訪問が難しいようであれば、対象地域のコミュニティーセンターに本を届けて、近くの生徒や住民に自由に読書をしてもらう等の活動を計画している。

(TAAA南ア事務所 平林薰)

[Page Top ▲](#)

2020-5-17 南アフリカ

コロナ禍における南アのロックダウン(1)

～最大の問題は食糧確保～

3月27日から始まったロックダウンは、必需品購入以外“外出禁止”的レベル5が4月30日まで続き、5月1日からは少し緩和されてレベル4となった。レベル5の際には散歩も許されなかつたが、現在は朝6時から9時まで限定でエクササイズが許可されている。買い物は近くのヒバディーンのスーパーで済ませていたが、レベル4になってからやっと少し先のショッピングセンターに行かれるようになった。以前、南アでは病院関係者以外マスクをする姿は全く見られなかつたが、現在は外出時にマスク着用が義務付けられている。当初は医療用や建設作業用マスクをつける人が多かつたが、手作りマスクから始まり、今では多様なマスクが販売されている。特にアフリカンプリントや南ア国旗のマスクはカラフルで洒落ていて、アフリカ人のアートセンスを感じさせる。

南アのロックダウンでは酒・タバコの売買が禁止で、飲酒・喫煙者の多い南アでこの措置は人々

にとってかなり厳しいものとなっている。集まって飲んだり、酔ってうろうろする人たちが“うつる・うつす”可能性が最も高いからで、タバコは紙巻きをして唾をつけたり、回し吸いや拾いタバコをする人もいるため禁止となった。ただ、どちらも闇取引が横行しているようで、警察の取り締まりも厳しい。皮肉にも“酔っ払い”がうろうろしなくなったことで犯罪は確実に減少しており、また、外出禁止で車の往来が減ったことから、交通事故も大幅に減少している。

もちろんロックダウン中も老齢年金や子供の養育支援金等、社会保障の支給は継続しており、非常事態への対応として支給額の上乗せも決定した。加えて失業者保険として、月R350を半年間支給する制度もでき、連日登録希望者が長い列を作っている。スーパーの入り口でもそうだが、この長蛇の列はあちこちで見られ、つくづく“今の世の中、ソーシャルディスタンスは難しい”と感じる。特にタウンシップやインフォーマル（違法）居住地の人たちの多くは密集した形で生活しており、“トイレが外にあるのに外出しないわけにはいかない”“一部屋に家族全員が生活していて隔離など無理”と訴えている。

ロックダウン中の最大の問題は人々の“食糧確保”である。レベル4になり、少しずつ仕事を再開する業界も見られるが、いまだにスーパー以外の小売店、飲食関係、娯楽、観光業界は滞っており、それらの業界を支えている多くの人たちが今後不安定な状況となっている。タウンシップやインフォーマル居住地ではこのような業界の、底辺ではあるが最も重要な仕事をしている人が多く、かつまた家庭での唯一の収入源である場合が多い。もともと失業率がとても高い南アでは、家族の社会保障金や、運よく職に就けた家族のそれほど多くない収入に頼って何とか生活している家庭が多く、ロックダウンによってこのバランスが崩れてしまったと言える。

学校は3月20日から30日までイースター休暇の予定だったが、コロナ禍が広まり、早めに18日（実際には16日）から臨時休校となつたままロックダウンに入ってしまった。世界中の国々で学校閉鎖による学業の遅れや再開に向けて混乱が続いているが、南アで学校閉鎖が長引くことは生徒の死活問題につながりかねない。前述のような環境で生活している子供たちは、学校給食が一日のうちで一番しっかりととした食事であるケースが多い。家族全員がおばあちゃんの年金に頼って生活している家庭の子供たちがお腹をすかせているのではないかと気がかりだ。ニュースの報道で、ケープタウンのタウンシップの女性が、“私たちはコロナではなく飢えて死んでしまう”と訴える姿に心が痛んだ。（続く）

（TAAA南ア事務所 平林薰）

[Page Top ▲](#)

2020-4-19 南アフリカ

現地で得た情報を紹介します <報告 その4>



Imbalecane小
コンテナ図書室



Mehlomnyama小でムタルメ学区インプレ
メロ小（元対象校）のンソミ先生と再会！



Umalusi小
図書室の時間割表

図書プロジェクト訪問報告最終回では、日本での本の収集・種分けの際に役立ちそうな情報や現地でのミーティング等で知り得た情報を羅列的に紹介しておくことにします。

○ こんな本が欲しい

生徒・教員を含めてもっとあつたらいいとしてあげたのは、絵本、世界地図、やさしめな読み物、算数・数学参考書、経済学、物理学、会計学、文学、聖書関連読み物、百科事典、詩集、演劇脚本、歌（特に靈歌）、現地語ズールー読本、教科書に沿った参考書で、最後の2種は、現地で調達してもらうものです。また、農業塾MOATSではリソースセンターに来る近くの大学生・専門学校生用に工学、ビジネス関係のものもあるとありがたいと言われました。

○ 注目すべき運営アイデア

- 図書委員会にSGB（School Governing Body）から保護者が参加している学校があった。
- 図書室利用を年会費制とし、年1回5ランドを払って、会員証を受け取り、利用時に提示するというシステム導入（1校）。
(会費は、日本からの支援終了後、自立した図書室維持費に充てる)
- 学校が休みの土曜日に特に12年生用に開室時間を設定（高校中心に複数校）

○ 要対応事項

- コンテナ図書室の暑さ、寒さ対策
- 必ずしもうまくいっていない複数の司書教諭の連携体制改善
対応策：図書委員会の会合やTAAA現地スタッフ巡回訪問の際には全員の参加要請を！
- 図書室に入ると「気取り屋」とみられるのを嫌って足が遠のきがちな高学年男子気風
対応策：男性司書教員を増やすなど？

○ 気になる南ア教育事情

- 生徒が抱える生活苦は様々あるが、「妊娠」による学業の中止は深刻。学校教育では性教育が行われておらず、教員は妊娠する生徒への対応なども含めてソーシャル・ワーカー兼カウンセラーの役目を果たさざるを得ず、良心的な教員はオーバーワーク気味。
- 今年は「読書年」と銘打たれ、就学前クラスから読書が奨励されているにもかかわらず、図書予算措置がない。今後さらに教育予算そのものが削減され、教員給与減額、生徒一人あたり×在籍者数で決まる各学校の予算も減額される見通し。使途別配分が決まっていて図書に流用するわけにもいかない。（おわり）

（大友深雪）

[Page Top ▲](#)

2020-4-08 南アフリカ

図書委員会生徒も先生たちも頼もしく個性豊かだった
—2020年3月初旬の図書プロジェクト視察訪問報告その3—



平仮名に興味がある Umalusi小図書委員会生徒たちと



男子が積極的なMalusi高の図書委員会

平林さんの発案で8つの小学校に配布され、比較的低めの目につきやすい本箱の上に立てかけられた「日本語・英語対照衝立」は、来室者に人気があり、そこに例示された日本語表現をすべて覚えて話しかけてくる生徒や、英和・和英辞典が欲しい、日本の料理・調理や着物に興味があると言ってくる生徒や、ひらがなの模写に挑戦してくれた生徒に出会えて、日本・日本語への興味の広がりとスポンジのような吸収力に驚かされました。

図書委員会活動には8人のメンバーにボランティアが何人か加わっているところもあり、総じて女子の方が多いようでしたが、特に男性司書教諭がいるところでは、男子の活躍も目立っていました。図書委員会生徒12人中8人が男子で、今回の訪問時には男性の司書教諭と男子図書委員2名が居合わせたある高校図書室で印象に残ったのは、司書教諭からも頼られ丁度貸し出し帳の整理・確認に夢中だった小学生と間違うほど小柄な9年生委員に「もっと欲しい本のジャンルは？」と声をかけたところ、ほぼ反射的に「経済、物理、文学、小説」という即答が返ってきたことでした。またこの高校でも新聞がかなり貯めてあるので、司書教諭にその辺の事情を訊くと、新聞は古くてもよい教材になるので、地元で集めてくるとのことでした。新聞を手に入れられる家庭は殆どないでしょうから、新聞を学校で読めるのは貴重なことなのだろうと思いました。



パワーと個性あふれるDuduzile中学
図書委員会メンバー



1ミリのズレも許さず本を並べる図書委員会生徒
"I like reading too much."

司書教諭の個性・実力にも負うところ大と感心させられたのは、3人（そのうち1人が男性）の司書教諭にも恵まれ、「言うことなし」の運営をしていたある中学校のことでした。「8年生は一クラス60人で、3クラスあり、各クラスには5人以上『本来の分類』だとスペシャル・スクールに行く生徒がいて、とても大変だけど、なんとかやっていかないと。だから、この子たち用に読み易くて楽しい読み物が欲しいの」と話してくれた中年のベテラン司書教諭が中心となり、図書委員会が頻繁に開かれているとのこと、訪問時の図書室も休み時間にはごった返すほど満員になっていました。もう一人の若くて元気な女性司書教諭が、5月か6月に8年生各クラスを対象に、クラス訪問セミナーを自分の担当教科のライフ・オリエンテーションと図書プロジェクトをタイアップさせる形で実施する計画について平林さんと打ち合わせをしている姿はとても頼もしいものでした。

最後にこの同じ中学校でのすてきなエピソードを聞いてください。私たちがいる間ずっと他のメンバーとは少し離れて1人真剣に本の並びを整えている男子生徒に目をとめた久我さんが、「何を読んでいるの?」と聞いたところ「動物」という答えが返ってきたので、久我さんは、「動物が好きなんだ」と応じると「いや、嫌いです」と。「ではどうして動物の本を読んでいるの?」と久我さんならではの?再質問には、「本が好きでたまらないから」ということだったそうです。図書室はこんな生徒にとっての大切な生活空間にもなっていたのです。(続く)

(大友深雪)

[Page Top ▲](#)

2020-3-29 南アフリカ

名前のある図書室・絵やポスターで飾られた図書室 —2020年3月初旬の図書プロジェクト視察訪問報告その2—



Bright Future Libraryの委員会生徒たち



Dweshula小の図書室「Funda Natsi (read with me)」

校長さんが組合活動にも熱心で不在なことが多いという学校の図書室を訪問した時、一人の図書委員が新聞を抱えて図書室に入って來たので、どうしたのか聞くと、校長先生が図書室用に確保してくれたとのことでした。Funda Nathi (Read with usの意)と図書委員会が名付けたその図書室では、修理が必要な本を入れるBook Hospitalと可愛く名うたれた大きな箱が本棚の上に用意されているのが目にとまり、「なるほど」と感心しながらも、修理して送るべきか、送るのを断念するべきかで悩まされる日本での種分け・荷造り時のことが頭をよぎった瞬間でもありました。

図書室に学校名ではなく独自の名前をついているところが他にも2校あり、一つはBright Future Library、もう一つはVukukhanye(Wake up Brightの意)というものでした。私たち訪問者にズールー語の名前を付けて楽しませてくれる現地の人たちの豊かな言葉文化に感じるものを感じました。



生徒が壁に絵を描くNANI高の図書室



天井にも手作りの飾りが一杯

文化と言えば、本棚の上方や間の壁に図書委員たちが描いた絵には見とれてしまうほど魅力的なものもあり、訪問した丁度その時に、コンテナ図書室の天井に色紙を切りぬいた動物や文字を楽しげに張り巡らしている図書委員たちにも出くわしました。



Malusi高の図書室に貼られたポスター



Malusi高図書室のジェンダー問題ポスター



Mgamula高の図書委員会体制一覧

また、“It is my right to read”といった格調高い標語や、Children’s Rights and ResponsibilitiesとかGender Issuesとかの表題のついた長文のポスターが所狭しと掲示しており、どこから手に入れてくるのか聞き損ねましたが、日本の学校図書室には期待できなさそうなその啓発性に注目させられました。



Umalusi小図書委員会生徒たち



Umalusi小図書室利用ルール



修理が必要な本を入れるBOOK HOSPITAL

特に小学校では曜日毎に使用学年が振り当てられていて、教師付き添いで生徒に本を選ばせ、教室に持ち帰り、教室で読んで、返却するというシステムをとっていました。同じ本が数十冊あるワークブックやペーパーバック読み物は授業直前に教室に運んで副教材として使える制度としても活用できるものだと思いました。（続く）

（大友深雪）

[Page Top ▲](#)

2020-3-19 南アフリカ

学校図書室には個性豊かな「アナログ文化」が咲き誇っていた
—2020年3月初旬の図書プロジェクト視察訪問報告その1—



2018年6月の現地訪問以来、1年半ぶりの南アでした。コロナ感染がアフリカにも広がり始めた時期で、3月1日の入国・11日の出国・帰国が心配され、断続的な「断水」と「計画停電」を経験して、南アそして地球の資源分配の行く末を案じながらの滞在でしたが、プロジェクト視察訪問は何とか無事に果たしてきました。

今回の主な訪問先は、2013年から2019年3月までクワズールー・ナタール州ウグ郡ムタルメ・トゥートン学区で実施した図書プロジェクトの応用的継承をめざした隣接のドエシューラ学区の12校の図書室でした。日本NGO連携無償資金協力事業「ドエシューラ学区の生徒の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得」として2019年9月から開始し、校内に図書室を作るスペースがない4校にはコンテナ図書室を設置(うち1校へは(一財)ひろしま・祈りの石国際協力交流財団より寄贈)、スペースのある8校では、図書室確保のための空き教室・校内倉庫などの大掃除・改修作業や本棚注文・備品設置を行ったり、改善・全面的模様替えを経て、全12校でスペースとしての図書室を整えました。

図書室の物理的セットアップと同時進行的に、図書委員会(図書司書教員2~3名と選出方法は各校一任の図書委員生徒原則8名で構成)の発足、委員会メンバーへの図書運営方法の手ほどき(蔵書受け入れ・記帳、図書分類法による蔵書整理、貸し出しルール等運営方針書作り、貸し出し帳・利用者記録簿作成、読書・自習スペース整備)、図書司書教諭への研修などが実施されました。

12校中準備が遅れていた最後の学校で図書室お披露目テープカットや朝会での全校生徒への図書活動開始宣言イベントが行われたのが、2月末で、私たちの訪問時には12校すべてで、図書活動が始まっていたのです。



12校に絞ったことで可能になった現地プロジェクトマネージャーの平林さんと現地図書指導員のモンドリさんによるこまめな巡回訪問支援の大きな効果もさることながら、学校によって温度差はありながらも、教科書以外本を見たこともなかった子ども達の並々ならぬ好奇心・学習意欲・芸術的表現力並びに図書司書教諭や管理職の知恵・熱意・協力が結実した姿をあちこちで実感できた図書室視察訪問となりました。

<報告その2>では、そんな姿のいくつかを紹介したいと思います。

(大友深雪)

2020-3-7 南アフリカ

TAAA対象校を訪問 (2)



最後に訪問したのが、MEHLOMNYAMA小で、サッカーボールが届いた先の学校である。日本の学校名が入ったボールでのサッカーの練習風景を見学させてもらった。ボールを寄付してもらったサッカー部の顧問から、私が出発する前にユニホームを預かった。そのユニホームをキャプテンの子が着てゲームをしている。約半年前に、我が家で空気を抜いたボールが、今は南アフリカの子どもたちに引き継がれ、子どもたちは笑顔で溢れている。とても感動的な瞬間だ。やっぱり世界はつながっているとつくづく思う。早く日本の子どもたちにも、この様子を知らせてあげたいと思った。

アパルトヘイトが撤廃され、「これで南アフリカが変わる」と、誰もがそう思っていた。だが、どうなのだろうか。ダーバンの街中に行けば、ストリート・チルドレンを見かける。電気・水道の通っていない家。駐車場で声をかけてきた青年など。以前に住んでいた頃の南アフリカと比べ、何が改善されたのだろうか。夕方、ロッジのテラスで、一人の黒人青年がぼーっと大西洋を眺めていた。しばらくして、声をかけてみた。彼は笑いながら近くに寄って来てくれたので、「南アフリカは、どう」と、尋ねてみた。彼は、「政府は崩壊 (collapse) している。あとは神に祈るだけだ」と答えた。彼は30歳代くらいで、子どもは5人いるが、仕事はあまりないと言う。「でも、マンデラは好きだ」と言ったのが、とても印象的だった。



寄贈されたサッカーボールと
ユニホーム（後ろ右から4人目）

この訪問を通して、教育という視点から見ると、個性豊かな校長先生のマネジメントで、これほどまでに学校の雰囲気が変わるものなのかと少々驚いた。南アフリカでも、教育委員会に近い組織はあるものの、これほどトップダウンで進められてしまうと、教師のモチベーションは保たれるのだろうかと少々心配した。同時に、学校格差が広

がることで、子どもたちがもっている本来の個性や適性、将来性の芽が摘み取られてしまわないかと不安を感じたことも事実である。最後に訪問した学校では、子どもたちが斜面になっている場所を利用して、空中前転をやっていた。ジャンプ台は石だ。きれいに宙を舞っている子。頭から落ちて痛そうにしている子などさまざま。日本では、100パーセントありえない光景だ。ただ、経験から学べる知識や技能もある。その線引きの違いは、国

によってこれほどまでに違うものなのかと改めて思い知らされた、でも、私はこの南アフリカで見た光景、決して嫌いではない。むしろ、私が幼少期を過ごした頃と同じで、とても懐かしい感じがする。

今回の訪問で、最も強く印象に残っていることは、子どもたちを直接指導する立場にある教員の育成だった。訪問したほとんどの学校で見られた教師の一方通行的な授業。換言すれば、子どもの主体的な活動があまり見られない授業マネジメントで、もっと子どもたちに考えさせたり、意見を交換させたりしながら、互いを理解し考えを深めていく場面が必要であると感じた。子どもたちの学ぶ意欲は高い。だからこそ、教師がもう一工夫できていれば、子どもたちの知識や経験はもっと深まり、主体的な生き方にもつながっていくはずである。

また、訪問した多くの学校では、国の教育方針の下、数学（算数）と英語にかなりの重きが置かれているように感じた。確かに、将来の仕事を見据えれば、これらの教科が重要な役割を担っていることは理解できる。しかし、教育は人格の完成を目指すものである。一人ひとりの個性や適性が埋もれてしまわないようにすることも学校や大人たちの役割である。また、日本でも、「社会に開かれた教育課程」の必要性が叫ばれているが、まさに「学習は学校の中だけでは完結しない」という方向性をしっかりと打ち出し、家庭や地域を巻き込み、学校での学びを実際の生活や実社会とどうつなげていくか、そのような点を改革していく必要があると感じた。きっと、10年後、20年後には、違った国の人々が見えてくるはずだ。そして、それこそがSDGs（持続可能な開発目標）の目指す教育の姿ではないかと思う。

日本人学校に勤務した時、マンデラ大統領の就任式が行われている広場に行ったことがきっかけとなり、学校に行けない子どもたちと出会うことにつながった。彼らとの出会いがあり、私はいつかこのような子どもたちの支えになりたいと思うようになった。30年にわたる日本での教職生活を終えても、それが私のゴールではなく、次の目標へのステップとなっている。今回の訪問は、その一段である。

私は、この出会いにとても感謝している。

(原山浩司 編集：TAAA)

[Page Top ▲](#)

2020-2-29 南アフリカ

TAAA対象校を訪問（1）

この度、長年教師をされてきた原山浩司様がTAAAの対象校を訪問してくださいました。原山さんは今年8月にみどり市立大間々中学校に声をかけサッカーボールを集めてくださいり、今回、ボール寄附先の学校も訪問されました。2回に分けて、原山さんの訪問記をご紹介いたします。（TAAA編者）

今回、私のアフリカ訪問のきっかけは、南アフリカ共和国ヨハネスブルグ日本人学校に3年間家族とともに赴任した年に、ネルソン・マンデラ大統領の就任式が行われている広場に行き、黒人たちの歓喜の渦の中で一緒に喜びを分かち合った。これが私のアフリカとの出会いの始まりである。

その後、学校に通うことのできない子どもたちとも僅かながら触れ合うこともできた。その頃から、私はいつかこの子どもたちのための支えになりたいと思い始め、今日につながっている。そして、自分の経験を生かすことのできる「教育」を視点に、現地に赴いて教育や子どもたちの支援にかかる活動をしている日本人や現地の人たちと会い、それらの活動やそこに暮らす人々の生活を通して、具体的な問題点や自分にできることを探ってくことにした。

2月11日、南アフリカに到着し、ダーバンからヒバディーンに向かう。今回、縁あって私の地元の中学校から使わなくなったサッカーボールを寄付してもらい、それがヒバディーンから30キロ程奥に入った学校で使用されていることを知り訪問した。同時に、TAAAが日本で集めた英語図書を近くの小学校や高校に配布しているということなので見学させてもらった。地方の学校には図書室がなく、教科書以外の本はほとんど見当たらず、本屋などもない。そのため、本を読む習慣はないと言う。また、南アフリカで人気のあるスポーツの一つはサッカーである。しかし、地方の学校にはボールがない所もあると言う。犯罪やドラッグに巻き込まれやすい環境でも、ボール一つあればそれが楽しみで、学校に行くという子どももいるそうだ。

TAAAの平林さんは、20年以上にもわたり南アフリカで活動をしておられる方で、今では日本と南アフリカをつなぐ存在である。大西洋岸からどんどん離れ、舗装されていない道を一時間ほど進んだところで、最初の訪問校であるNANI高に到着。この学校には、半年前から図書の寄贈を始め、既に1000冊に達しているそうだ。一日平均10人の生徒が本を借りていると言う。貸出帳もしっかりと備えられ、分類番号によって棚ごとに整理された本が並んでいる。図書室に案内された段階で、図書が有効に活用されていることが分かった。改めて本入手することが困難なこの地域で、この活動の意義はとても大きなものであると感じた。

次に、MBALENCANE小を訪問した。ここは児童数1000人の中庭がきれいに整美されている大きな小学校である。コンテナを再利用した図書室は、配布され始めたばかりであるために本の数は決して多くはないが、きちんと整理されていて図書への期待感が伝わってきた。

続いて、MGAMULE高を訪問した。こちらもコンテナを再利用した図書室であり、その中には図書室の利用の仕方や貸し出しの決まり、図書の目的等がちょうど掲示されるところであった。図書委員のメンバーが自主的・意欲的に活動している姿がとても印象的であった。

インターネット等の普及により、いつでも必



MBALENCANE小学校のコンテナ図書室



NANI高校の図書室にて



要とする情報は手に入る時代となった。それが一つの原因となって、日本でも、特に子どもたちの図書離れや読書時間の減少が危惧されている。しかし、世界に目を向ければ、情報ネットワークの整備がされていなかったり、ましてやそのための機器を購入したりするなどが困難な現状が多く見られる。それを補うことができるのが図書（館）である。ケニア政府もそうであるが、「教育には力を入れていく」という。だとするならば、住民が教育や文化、産業などの課題解決につながる資料や情報に接する機会を増やしていくことを優先的に考えていく必要があると思う。そして、いつの日か日本の図書文化と現地の図書への情熱が融合し、新たな図書文化が子どもたちの成長につながっていくことを期待したい。（続く）

（原山浩司 編集：TAAA）

[Page Top ▲](#)

2020-2-1 南アフリカ

アンバサダーが活躍するMOATS



小学校の敷地内に有機農業塾を設立し地域住民に有機菜園指導を行ってきたJICA草の根事業「有機農業塾を拠点とした農村作り」は2019年4月末で終了しましたが、有機農業塾MOATSと事業内容は、終了後、非営利会社（Non profit company）として地元に引き継がれました。JICA事業期間中にカウンターパートだった州環境省のザマ氏と地元スタッフ2人が中心となり、日本からの事業資金で運営されていた状態から、資金も車も給料もない完全地元ボランティア運営へと大転換を果たしたのでした。

TAAAは、NPC（Non Profit Company）MOATSから四半期毎の事業報告をいただいています。報告からは、様々な困難はあるものの、地元にあるリソースをフルに活用しながら、地元に着実に根付いている様子が見えてきます。

州環境省、地元NGO、地域グループなどとネットワーキングを構築していることにも頼もしいものを感じますが、私が特に目を見張るのは、農業塾の卒業生としっかり繋がり、彼らをリソースとして地域の有機農業促進へ活かしているやり方です。



農業塾の卒業生の中には、プロの農家として会社を立ち上げたチリザ氏を筆頭に専業農家や兼業農家になった人や、協同組合や地域菜園グループを立ち上げてグループで畑作りをする人達が出てきて、彼らは今でもMOATSと繋がり協力し合っています。MOATSは彼ら積極的な卒業生ファーマーのなかから、地元で有機農業を普及するリーダーとして7名を選び、リーダーシップ・トレーニングを提供しました。トレーニングを受けた7名は“アンバサダー”となり、「有機菜園を始めたい」という近隣住民を指導するようになりました。このやり方は、地元での有機菜園の普及に大変効果的で、アンバサダーの何人かは、各自で菜園グループを立ち上げ、その中から指導できるファーマーが育つなど、アンバサダーの周辺では、着実に家庭菜園や菜園プロジェクトが増えてきているそうです。

私はこのアンバサダーという自尊心を向上させる名称に、脱帽しました。産業が少なく多くの若者が失業している地域です。健全な自尊心を育む機会が少なかったがために、大きな潜在能力を持ちながらも自分に自信を持てずに発揮できていない地元の若者を大勢見てきました。逆に、ちょっとした自尊心の向上で、大きく成長した若者たちにも会ってきました。「アンバサダー」と呼ばれる彼らの誇らしげな顔が目に浮かんできます。

JICA事業期間中は、地域に「ないもの」ではなく「あるもの」に目を向けて、地元のリソースを活用していくことを目標にしていました。なかでも一番大切なリソースはヒューマンパワーで、人に目を向けて働きかけることを、私たちは全ての活動においてとても大切にしています。MOATSはTAAAの考えを地元流にさらにパワーアップして引き継いでくれています。様々な課題はあるものの、地元の人々を精神的にも技術的にもエンパワーしながら、彼らと一緒に着実に成長していくこうとするMOATをこれからも熱く応援していきたいと思っています。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)